

## 「世界一労働時間の短いオランダの労働環境と産業の変遷」

現在、日本では労働時間の超過、サービス残業の増加、妊娠や育児、病気などの休暇が取れないなど、労働環境の劣悪さが話題となっている。それとは正反対に、オランダは世界一労働時間が短く、休暇制度や賃金の規定などの法律が厳しく規定されているにも関わらず、一人当たりの名目 GDP は日本を上回っている。本報告では、四か月間におけるオランダでのインターンシップを通して、所属していた研究所や近隣の店などでの経験から労働環境を調査し、市場や街並みをデジタルカメラで記録することで、オランダの市場は四つの特徴を持っていることに着目し、そこから日本とオランダの産業について考えた。

第一に、研究所におけるスケジュール管理と分業化について着目した。私の所属していた **Leiden University Medical Center** では、基本的に始業は 9 時半、終業は 18 時であり、その時間から 30 分も経てばオフィスには殆ど誰もいなくなる。また、研究室に所属する学生は自分の実験の開始する時間のみ研究室に訪れるだけの人もいる。このように労働時間が遵守される背景には、オランダの研究所におけるスケジュール管理と分業化の徹底がある。私の所属していた研究室では、実験の計画はほぼひと月前から連絡され、細かい時間が設定される。また、使用する計測機器などには事前に予約を行うことで他の人と予定が重ならないよう徹底されていた。これにより、研究員は自分の実験を速やかに行うことができる他、空き時間にどういった実験が可能かなど詳細なスケジュールを事前に組み立てることができる。また、高度な知識や注意を要する質量分析装置などにはそれぞれ専門の技術職員がおり、操作はその人に行ってもらい、データ解析のみを学生や研究者が行うルールとなっていた。さらに、同じ研究室の **PhD** でも、免疫研究、動物実験、質量分析など細かい分野に特化した専門家が存在し、互いに最も詳しい人に実験の一部を委託したり、詳しく聞くことができる。この細かい分業体制により、時間の効率化は勿論機器の使用に際しての安全性やデータの正確性が保障されるというメリットもある。また、日本のように上の立場の人の意見のみを重視するというよりも、そのプロフェッショナルの意見を聞いて共有するという姿勢に、その根底に互いの技術や知識を信頼し、自分の研究に自信を持つという研究者として重要な姿勢を見ることもできた。

第二に、街中の景色から見る専門的店舗の存在である。オランダには日本の大型ショッピングモールやデパートのように 1 つの大きな建物に異なる店舗が多数存在する店はほぼ存在せず、オランダは 1 つの専門的なカテゴリに特化した店が並ぶショッピングストリートが存在する。そこは日本の商店街からアーケードを取り払ったような形に似ており、たとえば青果店、鮮魚店、リカーショップ、洋服店、スポーツ用品店の他、パン、チーズ、オリーブオイル・ピネガー、チョコレート、タバコ、靴だけのリサイクルショップ、ポストカード、チューリップ、大麻のみの専門店など非常にユニークな店が多く存在する。買い手はこれらの店舗で専門的な知識を持つ店員とニーズに応じた買い物をすることができる。また、そのような店舗の中に数店、日本の大型デパートのような店舗を構えるものもある。しかし、この店で売られている商品はすべてプライベートブランドのみで、非常に安価である。これらの小規模専門店・大型店

舗は基本的に平日は 9 時に開店し、18 時にはすべての店が閉店するが、町によって決まった曜日にもみ営業時間を延長し、21 時まで営業が行われる場合がある。また、土曜、日曜はほとんどの店が休みをとるか、若しくは午後のみ営業が行われ、閉店時間も早くなることもある。またオランダにはコンビニエンスストアは存在しないが、夜しか営業していない店が存在する。これもチェーン店のようなものではなく、多くは個人経営の店舗であって、通常のスーパーマーケットよりも非常に割高な価格での販売となっている。そのような店であっても、深夜・早朝の営業はしていない。さらに、この他にオランダでの買い物の特徴として大きい役割を担うのが、マーケットである。週に 1～2 回屋外で開催されるマーケットは、前述した小規模な専門店がさらに安価な価格で露店を展開しているものである。以上のように、消費者は専門性や価格のニーズに応じた店舗を選び、多様な店舗形態の自由さに統一された休暇形態が存在することで、全ての労働者は職業選択の幅が広がることになるのである。

第三に、オランダの税金の特徴と賃金についてである。オランダは、基本的な生活にかかる税金、例えば所得税は最大 25%、食品の消費税は 6%と比較的低い税率である。しかし、食品以外の消費税は 19%、タバコにかかる税金も日本より 200 百円程度高い。このように趣味や嗜好品に関わる税金を高くすることで、企業設立時や教育を受ける際に払わなければならない税金を抑えているのである。これにより、企業がオランダに支社を置くことや、EU 諸国からオランダの大学に入学することも容易くなり、結果的にオランダの繁栄に貢献してきたといえる。また、23 歳までの労働賃金は職種に関わらず年齢に応じて政府が最低賃金を定めており、学生や未成年のアルバイト・パートタイマー、非正規雇用者であっても労働時間を超過して働かされたり、安い賃金で働かされることはないのである。働くことのできる職種も日本とは少し異なり、学生などでは一般の企業の他にも大学や市が斡旋する博物館やチューリップ農場などのアルバイトも一般的である。また、オランダの街並みを見て感じるのが道路や建物の工事が非常に多いという点である。オランダは国土の 1/3 が海拔 0 メートルより低く、「世界は神がつくったが、オランダはオランダ人がつくった」という言葉があるように、オランダの歴史は水害や自然との闘いであったのである。そういった背景から今もオランダの街中では道路や河川、住居の工事が非常に多く、その仕事もオランダの労働人口を増やすうえで役立っているといえる。

第四に様々な文化が法律で許可された自由の国であるという点である。オランダは国際貿易を中心として発展し、現在は産業は金融・流通といったサービス産業が多くを占めている。その他にも、エネルギー資源産業では天然ガスの大量生産国であり、製造業ではハイネケンなどの食品産業、フィリップスに代表される電気産業なども有名であり、貿易ではチューリップなどの生花を輸出するなどしている。こういった産業はオランダで非常に親しまれており、街中でその広告や店舗を多く見ることができる。しかし、こういった発展を遂げる社会の中で日本にはないオランダの自由な法律制度がある。その代表例として挙げられるのが、大麻・風俗産業・カジノ・同棲婚の合法化である。オランダの首都であるアムステルダム中央駅の目の前は、川沿いにオランダ的な建造物が立ち並び、トラムやバスの走る近代的美しい眺めが広がる。

しかし、そこから少し進むと大麻のにおいが漂う風俗街やカジノ、同性愛者のための飲食店が立ち並ぶ。これらの特殊な文化が存在することは、オランダ人が海外に行く際にボディチェックが厳しくなるなどのデメリットもあるが、これらの文化に惹かれた観光客がオランダの観光産業の発展に大きく貢献しているというメリットも存在する。

オランダは事業を開始する際に、メリットとデメリットの比較検討を重ね、感情論を置いた合理主義が徹底されていると言われている。そのような合理主義に加え、オランダは禁止事項をできるだけ避けることで秩序を保ち、失業問題などの貧富の格差を規制緩和による新自由主義によって現在の社会を作り上げた。私が挙げた四つのオランダの市場・産業の特色は、世界一の労働環境を作り上げ、こういったオランダの発展した文化を作り上げるに至ったといえる。日本は、現存するオランダの市場・文化とその合理的な考え方を参考にすることで、より良い労働環境と更なる発展を遂げることができるといえる。